新一のプロポーズ大作戦！！

明智つばめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新一のプロポーズ大作戦！！

【Ｎコード】
Ｎ６０５６Ｒ

【作者名】
明智つばめ

【あらすじ】
新一と蘭が告白、プロポーズをへて結婚するまでを描いたラブラブ小説です！！
告白も書きましたので合わせてご覧いただけたら嬉しいです☆
今回はプロポーズですので例のあの場所でのリベンジです（笑）

ｐｒｏｐｏｓｅ－プロポーズ－

工藤新一が毛利蘭に告白をし、付き合いはじめた
その後、
二人は高校を無事に卒業し大学は別々に進んだ

前より出かける回数は減り工藤邸で過ごすことが多くなっていた…

いつものように蘭は合鍵を使って工藤邸のドアを開ける
「新一～？いるんでしょ～？」

蘭は返事が返ってこないのを不安に思ったが
真っ先にいつも新一がいる書斎に向かった

「あれ？いない…
もぉ！出かけるんなら連絡してくれればいいのに！」
蘭はそう言うとデスクの縁ギリギリに積み上げてあった本を直した

事件調書や辞書、小説などの本が重なっている
机の上に目をやるといつもはないメモ書きがあるのを見つけた

『米花センタービル、展望レストラン８時』

「米花センタービルの展望レストランって確か…」

『以前殺人事件があった場所で伝説のカップルがプロポーズをした場所
結局、新一は戻って来なかったけど…
本当は何が言いたかったんだか本人からは聞けなかったしな…』
蘭はそんなことを考えながらメモを握りしめた

「とりあえず行ってみようかな…」
蘭は独り言を言うと工藤邸を後にした

ー米花センタービル展望レストラン・8時ー

「あの～すいません！
工藤って名前で予約ありますか？」
蘭が言うとウエイトレスはにこやかに案内をした
「はい！工藤様ですね！ご案内致します」

蘭は窓際のテーブル席に案内されて腰を降ろすとレストラン入口からスーツにネクタイはなし、ワイシャツのボタンを2個ぐらい外した青年が案内されているのを見つけた

彼はゆっくり蘭の反対側の椅子に座った
「ねぇ！まわりくどいやり方しないで素直に言えばいいじゃない！」

蘭が言うと新一はニヤッと笑った
「たまにはいいだろ？こういう待ち合わせも！」
「私がメモを見つけなかったらどうするつもりだったのよ！」

「蘭は机の上ギリギリに積まれた本を絶対に直すっていう自信があったんだ！
相手の性格を見抜くってのも探偵の基本だぜ？」
新一はククッと笑うとちょうどやって来たウエイトレスに料理を注文した

食事をしながら相変わらずホームズのこと、学校のことを話す
これも前回と変わらない…

新一は興奮しながら語っている
「でな、まだらのひも事件でホームズはこういったんだ！
医者が悪の道にはまると第一級の犯罪者になる。
度胸はあるし、知識もあるからなってさ！
でもワトソンに僕たちはまたその上をいくことが出来ると思うって
自信たっぷりに言ったんだ！」

「へ～！すごいんだねぇ」

頷いていた蘭だがとうとうしびれを切らした

「ねぇ、そうじゃなくてホームズの話しに来たんじゃないでしょ？
探偵さん？」

蘭が首を傾げると新一は焦りはじめた

「あっ…あぁ…実はな…」

「実は…？」

「なっ…なんて言うか…」

そこまで言うとウエイトレスがケーキとコーヒーを運んできた

「ありがとうございます！」

蘭はウエイトレスに丁寧にお礼を言った

「だっ…だから…」

新一は自分と格闘している

「はっきり言いなさいよ！」

蘭が言うと新一は目を見張った

「へっ？」

「どうせ事件の調査で旅行に行くから来ないか～とか言うんでしょ？」

蘭がデザートを頬張りながら新一に言った

「あっ…あははは
実はそうなんだよ！…」
「やっぱりね」

新一が蘭に顔を近づける
「っんなわけね～だろ！」
新一が顔を離すと蘭が続けた
「じゃぁ何なのよ！
こんな高いレストランに呼んで！」
新一は反撃するが冷や汗をかいている
「おめーがここのデザート美味しかったってずっと言ってるから連れてきてやったんだろ？」

（違う…言いたかったのはこれじゃない）

「確かに言ったけどそれだけだったならそんなメモに残して見つけさせたりとかしないでよ！」

「たまにはいいと思ったんだよ！」

蘭は食べ終わったデザートのフォークを静かに置いた

「私…帰る！」
蘭はバックを抱えると椅子を立った

すかさず新一が腕を掴む
「本当に俺が言いたかったのはなぁ！
」

「えっ？」
蘭が振り向く

（大丈夫！今なら言える！）
「おめーがいね～と困るんだよ！
だから…結婚してくれ！」

「し…新一！」
新一はゆっくり蘭の腕を離し、照れくさそうに頬を掻く

「蘭がいいならだけどな…」
新一はそうつけ足した

それを見ていた蘭は笑顔でお辞儀をした
「よろしくお願いします！」

そうすると…
どこからともなくレストランの中に拍手が沸き起こった

それに気分を良くした新一は蘭を椅子に戻らせた
自分も椅子に座るとポケットから四角い箱を出し、中身を蘭の指に
はめる

「わぁ～キレー」
蘭は窓から見える月に指輪をかざした

それを見ていた新一は蘭に言った
「これからもよろしくな！」

「うん！ありがとう！
新一！」

蘭は目一杯の笑顔を向けると指輪をはめた左手を右手に重ねて大事
そうに握った

（本当に本当に新一が言いたかったことってプロポーズだったんだ
ね…
ありがとう）

照れくさそうな青年と笑顔の少女は見つめ合うとまた他愛のない話
をはじめましたとさ

ｐｒｏｐｏｓｅ－プロポーズ－（後書き）

新蘭プロポーズ編楽しんで頂けたでしょうか？
作者が個人的に米花センタービルの話が大好きなためプロポーズの場所に選ばせていただきました！！
作中の新一が言っているホームズの言葉は『シャーロックホームズの冒険』のまだらのひもから引用させて頂きました。
気に入って頂けたら幸いです☆

次回は両親へのご挨拶ですかね…
もうこの二人は両親公認っぽいですけどね。
特に由紀子さんとか…
とりあえず次回作も楽しみにしていただけたら嬉しいです。
感想・ご意見などお待ちしています。

最後にこの小説をリクエスト頂きましたＷＩＳＨ０２様に感謝とお礼を申し上げます。
明智つばめ

ｇｒｅｅｔｉｎｇｓ－挨拶－（前書き）

新一が蘭の両親に挨拶をするお話です。
どうぞお楽しみください☆

ｇｒｅｅｔｉｎｇｓ－挨拶－

工藤新一は携帯で電話をしていた

「もしもし？」

『あら、新ちゃん！どうしたの～？』

「どうしたってあのなぁ」

『あら～そんなに冷たくしなくてもいいじゃない？
だって新ちゃんプロポーズしちゃったんだから次の段階を踏みたいなって電話したんでしょ～？』

由紀子のにんまり顔が電話越しに伝わってくる

「あぁ…」
（プロポーズしたなんてかぁさんに言わなきゃよかったぜ…）
新一が母に告げたことを後悔していると母が話を続けた

『でもね～うちは挨拶なくてもいいわよ～！
蘭ちゃんは昔からうちの娘同然だしぃ～
まぁ、優作はちゃんとしなさいって言うかもしれないけど今ホテルに缶詰だから帰れないしね～』
新一は呆れた顔で母に返答する
「じゃぁうちはとりあえず後回しでいいな…」

『ええ、後回しでいいわ！

でも私、蘭ちゃんに渡したいものがあるから来週までには日本に帰るわ！』

「何だよ！渡したいものって！」

『女の子だけの秘密よ～』
由紀子は唇に指をあてる仕草をした
「わぁったよ！じゃぁ日本(こっち)来る日になったら連絡しろよな！」

『はぁい！蘭ちゃんによろしくね』

電話を切ると新一がため息を着いた
「はぁ…これからが大変だな…」

ー毛利探偵事務所ー
「ちょっとお父さん！
今日新一が来るって言ったでしょ？」

蘭が怒鳴るとのんびり新聞を読んでいる小五郎が口を開く
「いつも来てる探偵坊主にかしこまるこたぁね～だろ！」

蘭が父を睨んでいると入口の扉が開いた
「あら？貴方も昔は、かしこまってたんじゃなくて？」

蘭は声をかけてきた母に目を向けた
「あっ！お母さん！」

小五郎は英理を睨むと新聞を無言でたたんで部屋を出ていった

「どうしたのかな？お父さん…」
蘭が心配そうな顔をする

「蘭…貴女もそのうち分かるわ…」
英理は蘭の方をポンポンと叩いた

しばらくすると呼鈴が鳴った
ピンポーン

蘭が走っていき扉を開けると新一が立っていた
スーツに真新しいネクタイをしている

「よっ！」
新一は蘭に言うと英理の前に行き丁寧に挨拶した
「こんにちわ！
お忙しいところ呼び出したりしてすいません」

「気にしなくていいのよ、新一くん！あの人も暇だったみたいだし…」
そう言うと英理は扉を見つめた

「あっ…おじさんは…」
心配そうな新一に英理は座るように促した
「そのうち来ると思うから座っていましょう！」
新一と蘭と英理が座って少したつと小五郎が現れた
黙って新一の向かいの席に座る

「でっ？話ってなんだ？」
新一は小五郎のその言葉に息を飲む

「あっ…はい！
実は蘭さんと…」
そこまで新一が言いかけると机をバンっと叩き、蘭が立ち上がった

「新一と結婚させてほしいの！」

新一は呆気に取られた顔で蘭を見つめている

一瞬の沈黙が流れた

英理が口を開く
「今日は蘭のが一枚上手みたいね
そこまで新一くんのことが好きなら止められないもの」

英理が言うと小五郎が続けた
「そうだな…
蘭をよろしく頼むぞ」

蘭は恥ずかしそうに微笑むと椅子に座り直した

「そういえば、由紀子と優作さんには言ったの？」

英理が言うと新一が応えた

「いえ、母にはこちらに先に伺うように言われましたので…」

「そうだろうな！
お気楽極楽な由紀ちゃんのことだからお堅いことは後回しだろうな！」
小五郎はそう言うと席を立った

「貴方、どこいくのよ！」

英理の言葉を無視するように小五郎は言った

「祝いの席だからな！
一杯飲んでけ！」

ー次の週、工藤邸ー

「あら～蘭ちゃんいらっしゃい！」
由紀子はにっこり笑うと家へ招き入れた

新一は相変わらず書斎デスクに積み上げられた本の奥に埋まっている
蘭が部屋に入ったのに気がつくと新一は近づいて耳打ちした

「かぁさんが蘭に渡したいものがあるみたいだぜ！」

新一はウインクをすると部屋を出ていった

代わりに由紀子が入ってきた
「蘭ちゃんおまたせ～！
実はね、渡したいものがあるのよ～！」

由紀子はにっこり笑うと小さな箱を取り出して蓋を開けた

「これって…」
蘭は不思議そうな目で見つめた

それを見て嬉しそうに由紀子が話した

「これはね、私がお婆様から貰ったネックレスなの
この真ん中のガーネットが素敵なロケットでしょ？」

「はい！すごく素敵です！」
ガーネットが入ったハート型のロケットネックレスを蘭が目をキラキラさせながら見つめた

それを確認すると由紀子は箱を閉じて渡した

「これはお守りなの
今までずっと私を見守ってくれた
でもね、今度は蘭ちゃん貴女に持っててほしいの」

「いいんですか？」

「えぇ、蘭ちゃんがうちの娘になった記念よ」
由紀子がそう言うと蘭はもう一度ネックレスを見つめた

蘭はなんだかものすごく嬉しかった

新一はドアの隙間から見ていたが蘭が嬉しそうなのを見てニヤリと笑った

実は毛利探偵事務所での出来事には続きがある

「祝いの席だからな！
一杯飲んでけ！」
と小五郎が言った後の話である

英理は酔っ払った小五郎に呆れて帰り、酔っ払った小五郎はつぶれて寝てしまった

「はぁ、やっぱりこうなるのかよ…」
新一は呆れながら蘭を見ると蘭の顔は真っ赤だった

「あれ～？新一～？」
蘭は明らかに酔っぱらっていた

「おい！蘭！大丈夫か？」
新一が慌てて近寄ると眠そうな目で口を開く

「う～ん…良かった…
私、新一とずっと一緒にいられるよ」
酔っ払った真っ赤な顔で蘭はにっこり笑った

いつもの蘭ならお酒なんか飲まないがきっと楽しかったのだろう

新一は蘭の頭をポンポン叩くと蘭は寝息を立てはじめた…

「新一…」

新一はふっと笑うとブランケットをかけようとした

すると蘭は寝言を言う

「ま～たホームズの話～？ホームズ！ホームズってホームズと結婚すればいいじゃない…むにゃむにゃ」

ブランケットをかけながら聞いていた新一が悪態をつく

「悪かったな、ホームズオタクで…」

新一はそっと立ち上がると蘭の髪をかき分けおでこにキスをした

『夢の中まで出てくるとは俺は幸せ者だな…』

そう呟いてゆっくり毛利探偵事務所を出ると新一は夜の闇に消えていった…

ｇｒｅｅｔｉｎｇｓ－挨拶－（後書き）

いかがでしたでしょうか？
一応、蘭のご両親にご挨拶という形にしました！
作者的には毛利家、工藤家共に挨拶とか結納とかなさそうだななんて思っていたりするのですが書くのは意外と楽しかったです☆
美女の酔っ払いネタを入れたかったという願望を叶えさせて頂きました。

さて、次回はどうしようか悩み中ですので内容は明かしません！！
楽しみにして下されば嬉しいです！

ご感想・ご意見お待ちしております。
明智つばめ

ｈａｖｅ　ａ　ｌｏｎｇｉｎｇ―憧れ―（前書き）

色々迷った結果、両親顔合わせは飛ばしました。
なので会場選び編ということでちび新蘭が登場します。
読んで頂けたら嬉しいです。

明智つばめ

ｈａｖｅ　ａ　ｌｏｎｇｉｎｇ－憧れ－

新一と蘭は工藤邸の書斎にあるソファーに座りながら雑誌をめくっていた

「ここなんていいんじゃね～か？」
新一が雑誌に載っている教会を指差す

「う～ん…」
蘭は首を傾げた

それを見て新一は嫌そうな顔をした
「何だよ…」

蘭は新一を見つめると雑誌をパラパラめくってひとつの教会を指差した
「ねぇ、昔のこと覚えてない？」

「昔のこと？」
新一は考え込んでいたがやっと思い出した

それは二人が小学生の時のお話…

その頃の二人は学校が終わると毎日のように冒険をしていた

「ねぇ、新一～
今日はどこへいくの～？」
蘭が丸い目をキラキラさせると新一の顔を覗き込む

それを見た新一はぶっきらぼうに言う
「今日は着いてくるなよ！」

「えぇ～！？」
蘭が悲しそうな顔をすると新一はしょうがないなぁという顔で地図を見せた

「ちょっと遠いけどここに行きたいんだ！」
新一は地図を指差しながら言うと地図をしまった

「そこってさ、もしかして…」
蘭は途中まで言うと新一が真っ直ぐ歩いていくのが見えた

「ちょっと待ってよ～」
慌てて蘭は追いかける

大通りに着くと新一は後ろから着いてくる蘭の手をとった

「あぶね～から離すんじゃね～ぞ！」

「うん！」
蘭は手を繋げたことに素直に喜んだ

公園を抜けて、草いっぱいの茂みを抜けて、橋を渡る

もう、足はヘトヘトで二人は座りこみそうだった

「だから着いてくるなって言ったんだよ…」
蘭の疲れた顔を見て新一は愚痴をこぼした

「だって、おいてけぼりやだもん」
蘭は言うと下を向いた

それを見た新一は慌ててつけ足した
「もうすぐ着くから我慢しろよ！」

「うん！」
蘭はにっこり笑うと手を握りなおした

そして…
二人が歩き始めて一時間着いた先は…

「着いたぜ！蘭！」
新一が笑うと蘭は目をあげた

「うわぁ！素敵だねぇ」
蘭はその大きな建物に驚いた

「なんで新一はこの場所知ってたの？」
蘭が不思議そうな顔をすると新一は言った

「かぁさんが見せてくれた写真の中にあったんだ！
聞いたら杯戸町にある教会だって言うからさ」

「へぇ～こんなに素敵なの独り占めしようとしてたんだぁ」
蘭がそう言うと新一は目をそらした

「ちげ～よ…」
（今日は遠いのが分かってたから下見のはずだったんだよ
本物見て蘭が気に入りそうだったら博士に車で連れてきてもらおう
と思ったのに…）

「まぁいっか！素敵なの見られたし！
ありがとう新一！」
蘭が笑顔を向けると教会の入口から神父が出てきた

「おや？小さなお客さんだね」
神父は二人ににっこり笑いかけると
「どこから来たんだい？」
と尋ねた

「米花町だよ！」
新一が言うと神父はびっくりして二人を見た

「そんなに遠いところから来たのかい？
大変だったね～」
そう言うと神父は蘭と新一の目の高さに合わせて座った

「せっかくだから中を見ていくかい？」

蘭が思いっきり頷くと神父は二人を中に連れていった

「この教会はね、このステンドグラスを目当てに結婚式を挙げる人が多いんだ
真ん中には聖母マリアと天使が描かれていて五枚の大きなステンドグラスは二人を見守り祝福する神様が描かれているんだよ」

「すごいね～新一～！」
蘭はうっとりとステンドグラスを見つめた

（よかったな！蘭…）
新一はそう思いながらこっそり笑った

そんな二人を見ていた神父はにっこり笑うと二人に言った
「二人共、大きくなったらまたおいで」

「「うん！」」
二人は頷いた

その後、神父は新一から博士の家の電話番号を聞くと迎えに来るよう連絡をしてくれた

博士が迎えに来て神父にお礼を言った
車に乗ると後部座席に笑顔の新一と蘭が座っていた

「どうしたんじゃ？二人共？
何かいいことがあったのかな？」
その博士の問いに二人は顔を向かい合わせてふふふっと笑った

―工藤邸―
「そんなこともあったっけ…」
新一が言うと蘭はため息を着いた
「やっぱり忘れてたんだ」

「あぁ…」
(悪かったな覚えてなくて…)
新一がじと目で蘭を見ると蘭は立ち上がった

「今から教会、見に行ってみようよ!」
蘭はそう言うと新一の袖を引っ張った

「しょうがないな〜」
新一は渋々立ち上がると部屋から出ていった

新一は車のキーを片手に戻ってくると蘭と一緒に家を出た

車でしばらく走る
すると教会が見えてきた

教会に着くと二人は昔と変わらない建物に息をのんだ

「やっぱりここがいいな」
蘭が笑うと新一は扉から神父が出てくるのを見つけた

「あの！すいません！」
新一は神父を呼び止めた
神父は二人に近寄ると気づいたように笑った

『おかえりなさい！
小さなお客さん』

二人は神父が蘭と新一を覚えていたことに驚き、あのときのように
顔を向かい合わせてふふふっと笑った

ｈａｖｅ　ａ　ｌｏｎｇｉｎｇ－憧れ－（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか？
蘭ちゃんはきっと和装より洋装のが好きだろうなと思いまして…
新一も和服より洋装のが似合いますしね。
和服はやっぱり平和コンビの担当でしょう（笑）
次回はやっと結婚式を書く予定です。
長編にしたいので前編と後編があるかもしれません…

ご感想・ご意見お待ちしております。

明智つばめ

marriage－結婚式－前編

やっとこの日を迎えた
花嫁は鏡の中に写った自分に微笑んだ
するとドアをノックする音が聞こえた

「どうぞ」
花嫁が言うと三人の中学生と茶髪の女性が入ってきた

「わぁ～！蘭おねぇさんキレ～」
あゆみが嬉しそうに近寄ると光彦と元太も一緒に近づいた

「本当にキレイです！」
「すっげ～！」

三人は口々に蘭を褒めた

「ありがとう」
蘭がにっこり笑うと園子が言う

「これはあいつにあげたらもったいないなぁ…
蘭！すごくキレイよ！」
園子はそう言ってウインクすると蘭に耳打ちした

「新郎どこいったのか知らない？」

蘭は慌てて言った
「あれ？さっき出ていったよ」

すると園子は小声で言う
「さ～ては逃げたか～？」

「えっ？逃げた？」
蘭がますます慌てると園子は蘭の肩を叩いて言った
「な～んて！蘭はそこでど～んと構えてれば大丈夫よ！」
園子はそう言うと中学生三人組を連れて出ていった

ー中庭ー
白い燕尾服を着た花婿は教会を見つめていた

（とうとうこの日が来たか…）
色々な想いを廻らせて花婿は目を細めた

「な～に黄昏（たそがれ）てんのよ！」

その声に新一が振り向くと園子が立っていた

「そんなんじゃね～よ！」

新一がそっぽを向くと園子は笑った

「蘭キレイだったわよ〜！あんたにあげるのがもったいないくらい！」

「そうだな…」

「嫌に素直じゃない！
そんなに弱気だと園子様が蘭をさらってっちゃうわよ？」
園子がにんまり顔で言うと新一が反撃した

「なっ…何言ってんだよ！」

その慌てた顔を見た園子は、めずらしく真面目な顔をした
「蘭を泣かせたら承知しないわよ！新一くん…」

その真面目な顔を見た新一は約束した
「あぁ…分かってるよ…」

その言葉に安心した園子はくるりと身を翻した
「主役がいないんじゃ盛り上がんないんだから早く戻りなさいよ！」

園子は手をヒラヒラ振ると去っていった

また戻って花嫁控室…

園子達が去ってから5分後、賑やかな二人組の声が聞こえてきた

「なんで、こういう日に限って忘れんの？」

「アホ！お前がせかすから携帯忘れたんじゃ！」

「なんやて！はよういかんと間に合わへんとか言うたのはそっちやん！」

二人は言い合いをしていたが花嫁控室に入るとぴったりとやめた

「あっ！服部くんと和葉ちゃん！」
蘭が振り向いて二人を迎え入れた

「わぁ～！蘭ちゃんキレイやわぁ！」
和葉が声をあげると平次も続けた

「工藤にあげるのもったいないなぁ」
平次がにんまり笑う

「あれ？工藤くんおらんの？」

和葉が辺りを見回す

「うん…なんか最初はいたんだけどどっか行っちゃって…きっとフラフラしてるのよ！」
蘭が苦笑すると平次がクルリと後ろを向いた

「和葉！おまえ、このね～ちゃんのところにいろよ！」
そう言うと平次は部屋を出ていった

「えぇ！？ちょっとどこいくん！へいじ～！」
和葉の声も虚しく平次の姿は遥か向こうに消えていた

ー控室の建物入口ー
ふらっと花婿が自動扉を入ってきた
そこへ若い男が怒鳴り付けた

「おい！工藤！お前なにやってんねん！」

新一はきょとんとしながら頭をかいた
「あっ…いや…なんか落ち着かなくってよ…」

「お前主役なんやからフラフラすんなや！
白い服着た男なんてどこにいたってめっちゃ目立つで！」

平次に一喝されてようやく観念したのか新一は言った
「わぁ～ったよ！
戻りゃい～んだろ！」

新一はそう言うと控室に向かった
すれ違い様に平次がボソッと耳打ちした
「工藤…今度はあのね～ちゃん幸せにしてやり…」

その言葉に新一は静かに頷いた

その後…
教会にずらりと並んだ面々は花嫁が入ってくるのを待っていた

少しして小五郎と一緒に蘭が入ってきた

小五郎は新一に蘭を委ねると涙目で席に着いた

（これは夢かな…
今、隣に新一がいる
でも、あんなに我慢したんだもん
私だって幸せになっていいよね？）
蘭がそんなことを思っているうちに式は進む

花嫁が花嫁のベールをそっと上げて口づけをした

リーンゴーン
と言う教会のベルと共に花嫁と花婿が教会から出てくる
色鮮やかなフラワーシャワー
大事な人達の笑顔

教会の階段を降りると二人は女性陣を集めた
園子をはじめ、和葉、あゆみなど１０名くらいが並ぶ

「いくよ～！」
花嫁が後ろを向き思いっきり高くブーケを投げる
晴天の空に真っ白なブーケが舞った

ずっと待ってた幸せを誰かに分けてあげたい
そんな花嫁の想いを込めて…

ｍａｒｒｉａｇｅ－結婚式－前編（後書き）

やっと結婚式です！
ずっとずっと夢にまで見た結婚式…書きながら切なくなりました。
よかったね、蘭ちゃん！
さて、後編は披露宴か2次会かですが披露宴ってあんまり主役とお話できないんですよね…
新一に言わせれば「どうすっかな～」って状態ですがどうにかがんばります！
後編もお楽しみに☆

ご感想・ご意見・評価をポチっとしていただけると喜びます！
よろしくお願いします。
明智つばめ

ｍａｒｒｉａｇｅ－結婚式－後編（前書き）

結婚式編後編です。
披露宴とその二次会を書きましたが内容が薄かったらごめんなさい。

ｍａｒｒｉａｇｅ－結婚式－後編

披露宴も終盤に差し掛かり、花嫁が両親に手紙を読んでいた

「ありがとう！
お父さん、お母さん！」
涙をこらえながら花嫁は笑顔を作った

父は泣き目を腫らし、母は涙ぐみながら笑顔を向けた

会場から拍手が沸き起こったその時…
照明が落ちた

「素敵な手紙でしたよ…
お嬢さん」
奥の壁上から声が聞こえた

皆が辺りを見回す

スポットライトが当たるとそこには…
「かっ…怪盗キッド！？」
そこにいた全員が驚きの声を挙げる

「きゃーっ
キッド様、素敵〜」
園子は嬉しそうに声をあげた

「本当に怪盗キッドなのかね！」
目暮警部が電話をかけようと携帯を取り出した
しかし…
新一に目を向けると人差し指を口に当てる仕草をしている

それを見て目暮警部は立ち上がっていた佐藤刑事や高木刑事を座らせた

新一が立ち上がる
「予告状もなしに登場とはいい度胸じゃね〜か？」
そう叫ぶとキッドから返ってくる

「愛しい恋人（しゅくてき）の晴れ舞台を祝いに来るのに予告は必要ないと思うぜ？」

「おめでとう！愛しの恋人さん！」

そう言うとキッドは華麗にステージから消え失せた

そしてライトが着くと今まで会場にいなかったスーツの若い男が立っていた

新一は驚いている司会の男からマイクを取り上げた

「彼は大学で知り合った黒羽快斗くんです！
キッドもマジックの名手！
彼もマジックが上手いと大学のとき評判だったので協力してもらいました！」

その新一の言葉に拍手が沸き起こった

それに反応して快斗は照れるなと頭をさわると落ち着いて言った
「皆様、ご歓談ありがとうございました！」

そう言って丁寧にお辞儀をすると快斗は空いていた席に座った

そして…
披露宴は終わりを迎えた

「ら～ん！素敵だったわよ～」
園子が蘭に近寄った

「ほんまよ！蘭ちゃんきれいやったわ～」

和葉も口を揃えた

「ありがとう」
蘭は笑うとちらっと新一を見た

「なんで、あんな演出するって言わんかったんや！」
平次はキッドの演出に自分が加担出来なかったことを悔いていた

「しょ～がねぇだろ？
俺だってキッドが出たら反撃しろって言われただけなんだからよ～！」
新一が言うと快斗が近づいてきた

「あの演出よかっただろ～？」
にんまり快斗は笑うと新一の肩をポンポン叩いた

「おめーのせいでこいつに攻められてんだぞ！」
新一は平次を指さした

「わりぃわりぃ！
内容知ってたらつまんないだろ～？
マジックは楽しむもんだしな！」
快斗が平次に言った

「まぁ、それならしゃぁないなぁ」
平次は諦めの声をあげた
「もぉ！ちゃんとみんなに挨拶してよ！」
そう言うと蘭は新一を引っ張って行った

「俺たちも行くか…」
「そやな…」
快斗と平次も会場を後にした

ー二次会　立食パーティー会場ー
「さ～あ！騒ぐわよ～！」
園子の声高らかに二次会が始まった

「ねぇ、快斗！
青子はここにいていいのかな？」
二次会から参加した青子は言った
「主役二人がいいって言うんだから心配することね～って！」
快斗は料理を摘まみながら言った

「そうかなぁ…」
青子がそんなことを言っていると後ろから花嫁が近づいてきた

「中森青子ちゃんだよね？
来てくれてありがとう！」
蘭が笑うと青子が慌てて言った

「はっ…花嫁さん！？
えっと…毛利蘭ちゃん…」

「うん！よろしくね！」
蘭が微笑むと青子は安心して言った

「うん！今日はおめでとう！」

蘭はにっこり笑って
「ありがとう！」
と言うと去っていった

その頃、新一は…
高校のサッカー部の仲間に囲まれたりしていた

「やっと夫婦かよ～！
高校の時から夫婦かと思ってたぜ！」
チームメイトが言うと新一が反論した

「うっせ～な～！
高校の時は違うって言ってただろ～が！」

（やっと本当の夫婦か…）
新一は反論しながら微笑した

―帰り道―
「今日は楽しかったね！」
蘭はちょっぴり新一の前を歩きながら振り向いた

「そうだな…」
新一が静かに笑った

やっと…やっと…
君と一緒にいられる…

二人が空を見上げると空は暗くなり始めていた

ｍａｒｒｉａｇｅ－結婚式－後編（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか？
あえて哀ちゃんと博士は出してませんのでご了承ください。
快斗は新一の大学の友人という設定ですが正体はお互い知っている
という設定です。
つっこみは受け付けません！！
次は新婚旅行かなぁ…二人だったらどこ行くんだろう??
とりあえず次回もお楽しみに☆

ご感想・ご意見・評価をポチっとしていただけると喜びます！
よろしくお願いします。
明智つばめ

ｔａｋｅ　ｏｆｆ－機内－（前書き）

新一と蘭が新婚旅行中の機内での出来事です。

ｔａｋｅ　ｏｆｆ－機内－

成田空港出発ロビー

蘭はワクワクとパンフレットをめくっている

（やっぱりここも行きたいなぁ！

ホットケーキは外せないよね）

蘭は赤いペンでパンフレットに丸を付けた

新一は落ち着きなく飛行機が見える窓の外を眺めたり席に戻ったりしていた

「ちょっと～！

もうすぐ搭乗なんだから座ってなさいよ！」

「へいへい…」

蘭が言うと新一は渋々座った

その時だった

『７３５便ホノルル行き搭乗を開始致します』

アナウンスが終わると周りの人々がぱらぱらと立ち上がった

チケットを機械に通して長い通路を歩くと飛行機の入口に繋がっている

入口に立っていたＣＡにチケットを見せた

「こんばんわ！
お二人は２６Ｋと２６Ｈですので前方にお進み下さい！」

案内されて二人は席を探すとゆっくり座った

（えっと持ってきた旅行用の枕とこのブランケットをひいて…）

蘭が自分の空間を作っているのを新一はちらっと見て蘭の持っていたパンフレットを引ったくった

「ちょっと！返してよ～」

「いいじゃね～か！
どこに行きたいかぐらい知りたいだろ？」

新一はニヤッと笑った

要するに新一は今回の旅行計画は蘭に任せっきりだったらしい

「いいけどちゃんと返してよ！」

「分かってるって！」

新一はそう言うとパンフレットをぱらぱらめくりはじめた

（えっと…
有名なホットケーキにノースショアでカフクシュリンプ、免税店はきっとお土産だろうな…）

「なぁ、夕食って…」
新一が言いかけると蘭が言った

「決まってる日もあるけど…決まってない日はホテルに着いたら予約できるって！」

「へぇ～
じゃぁここととここ予約するといいぜ！」
新一は指をさして言った

「うっ…うん！」
蘭は新一に言われた所に素早く丸をつけるとシートベルトをつけた

その直後に機体は動き始め上昇した

「窓側で良かったね！」
蘭が隣を見ると新一は寝息をたてている

それを見た蘭はふふっと笑って新一のブランケットを直した

（新一、ＮＹの時も離陸してすぐ寝ちゃってたな…）
そう思いながら蘭はパンフレットをめくった

「お飲み物はいかがですか？」
ＣＡが蘭に尋ねた

「じゃぁコーヒーとお茶をお願いします！」

蘭が言うとＣＡは手早く飲み物をついで蘭に渡した
「どうぞ」
そう言うとＣＡは新一をちらっと見た

「もしかして…
前にＮＹに行ってませんか？」

「えっ？」
蘭が驚くとＣＡがこっそり言った
「私、高校生が事件を解決したＮＹ便にいたのよ
彼って有名な探偵さんでしょ？」

「はい、そうですけど…」
蘭が口ごもるとＣＡは言った

「やっぱり！
顔が似てるからまさかなぁって思ってたの！
彼が起きたら言っておいて、あの時はありがとうって！」
ＣＡは蘭にウインクをするとワゴンを引きながら去っていった

（びっくりしたなぁ！
今日はまさか事件なんて起きないよね…）
そんなことを思いながら蘭は貰ったコーヒーを啜った

機内が真っ暗になり人々が眠りに落ちた頃…
「すみません！」

「はい！どうなさいましたか？」
ＣＡが尋ねた

「水もらえませんか？
落ち着かなくて」
新一が言うとＣＡはにっこり笑って数分後に水を持ってきた

新一は首を傾げる
「あの～どこかで会ってませんか？」

ＣＡは頷いた
「えぇ、ＮＹ便でお会いしたと思いますよ、探偵さん！」

「へっ？」
新一が驚くとＣＡは続けて言った

「さっきお連れ様にも言ったんですけどね
私、貴方にお礼を言いたくて」

「お礼…ですか？」

「えぇ、
私あの時国際線に配属されて間もなくて…
しかもあんな事件が起こるし、貴方が事件を解決してくれなかったらこの仕事続けてなかったかもしれないわ！」

そのＣＡの言葉に新一は素直に喜んだ
「ありがとうございます！」

ＣＡはにっこり笑って新一の席を後にした

（事件が人の運命を変えるなら探偵はその周りの人を守れってか？）

新一は大きく伸びをすると蘭をちらっと見て呟いた

「その前にこいつを守らなきゃな…」

その決意の声は暗闇に消えるくらい小さかった…

ｔａｋｅ　ｏｆｆ－機内－（後書き）

読んでいただきありがとうございます！！
新婚旅行のはずでしたが飛行機編をいれさせて頂きました。
作者が飛行機大好きなため色々凝りたいところを我慢しました…
そのため、そのうち飛行機ミステリーを書きたいですね（笑）
そんなことはさておき、次回はハワイに到着します。
楽しみにしていただければ幸いです！

ご感想・ご意見・評価をポチっとお待ちしております。
明智つばめ

ｈｏｎｅｙｍｏｏｎ－予測不能－（前書き）

新婚旅行編です！
ラブラブというよりちょっぴりミステリー！！
でも最終話はきっとラブラブなはずです…

ｈｏｎｅｙｍｏｏｎ－予測不能－

ホノルル空港に着くと荷物を受け取って二人はバスに乗り込んだ
海辺のホテルに着くと旅行カウンターで夕食の予約をとる
早々とチェックインを済ませて二人は海が一望出来る部屋に入った
「わぁ～！海がすごくキレイだよ！」
蘭が窓に駆け寄ると同時にトントンとドアをノックする音がした
新一がドアを開けるとポーターが荷物を運んできていた
『この辺に置いてください』
新一は流暢な英語で指示をするとポケットに入っていたくしゃくしゃの１$札を二枚手渡した

ポーターはくしゃくしゃの１$札をしまい、
『ＴｈａｎｋＹｏｕ！マハロ』
と言うとそそくさと去っていった

そのやり取りを見ていた蘭が新一に問いかける
「ねぇ、マハロってどういう意味？」

「あぁ、ハワイ語でありがとうとかごきげんようって意味さ！」

「そうなんだぁ！」
蘭が新一の相変わらずの博識ぶりに感心していると新一が続けて言う
「アロハーは知ってる通りこんにちわ！で、分かりやすいのを挙げるとカメはホヌ、ホロホロは散歩とかかな」
「へぇ～！面白いね！
じゃぁまだお昼ぐらいだからホロホロに行こうよ！」
蘭が言うと新一は軽く頷いて二人は部屋を出た
外に出ると潮風が心地よく頬をなでた
二人は海岸を歩いていく
油断をしていると強い風が吹いた
「あっ！帽子が！」
蘭がかぶっていた帽子は宙を舞った
「ったく！しょうがね～なぁ」
新一はバシャバシャと海に入っていくと蘭の帽子を掴んだ

「ちゃんと押さえてね～からだろ？」
そう言うと蘭に帽子をかぶせた

「もうなくすなよ！」

「うん！」
二人は微笑むとまた歩きだした

二人は他愛のない話をしていた

しかし…
いつも事件に巡り合う疫病神の新一が今のところ旅行は順調で何事も起こっていない
それに新一は不満げだ

「なんかこれだけ順調なのも違和感あるよな～」
ポツリと新一が言うと蘭が反論した

「いいじゃない！いつも事件ばっかりなんだからたまには休んだら？」

そんなことを言っていたがやっぱり新一は疫病神…
何も起きないハズがない

新一はいきなり足を止めると少女の写真の入ったペンダントを拾い上げた

（鎖が切れてるけど錆びてないしさっき落としたばっかりみたいだな）

新一が考え込んでいると蘭が指をさした

「あっ！あれって…」

その指先には写真に写っていた少女が立っていた

何やら海に似合わないスーツにサングラスの男と言い合いをしている

『だから言ったでしょ？

私は貴方たちの欲しいものは持ってないわ！

分かったらはやくここから立ち去りなさい！』

少女が言ったことに男は怒りを覚えたのか少女の手首をぐぃっと掴んだ

その時…

いつの間にか走っていった蘭は少女と男の間に割って入った

「おい！蘭！」

新一の声も虚しく男の顔面すれすれに蘭の足刀蹴りが炸裂していた
男のサングラスは見事に砕け、それに観念したのか男は英語で罵倒しながら去っていった

「蘭！大丈夫か？」
新一が駆け寄ると蘭は頷いた

『大丈夫？』
蘭は少女に声をかけると少女は日本語で答えた

「えぇ、助けてくれてありがとう！」

少女はお礼を言うと蘭が日本語に驚いた

「日本語話せるの？」

「えぇ、私の祖母が日本人だからね」

そのあと少女は新一を見て言った
「旅行の邪魔をしちゃったみたいね…」

「そんなことないですよ
もしよかったらお話を聞かせてもらえませんか？」

「えっ？」
新一が言うと少女は驚いた
そして新一が言葉を返す

「あっ…申し遅れました！
日本で探偵をやっている工藤新一と言います！」

それを聞いた少女は言った
「そう、探偵さんね
それなら私の悩みも解決してくれそうね…」

そしてショートパンツのポケットから手紙を取り出した
「私の悩みはこれよ…
さっきの男は誰かのスパイでこの手紙の内容を知りたがってるわ」

「えっ！スパイ！？」
蘭が驚くと少女は言った

「えぇ、この手紙を狙ってるのよ…
私の両親は１０年前に亡くなったわ
祖母は一週間前に亡くなった
残ったのはこの手紙と祖母が築き上げた家だけ…
この手紙は３日前に送られてきたの
それからよ…さっきみたいな奴らが私の周りをうろついてるのは…」
それを聞いた新一は手紙を少女から受け取るとゆっくり読み出した

『親愛なる孫たちへ

貴方たち5人にこの手紙を送ります
この暗号が解けたらきっと幸せになれる
幸運を祈ります』

「その暗号っていうのがこれですね…」
新一が封筒からカードを出した

『一人目の王様は海に身を投げた
二人目の王様は助かった
最初からいたのは3人目の王様だけ
宝を持っているのは双子の王様』

蘭が首を傾げる
「双子の王様ってどれのことだろう…」

考え込んでいた新一が少女に言った
「あの…お婆さんにお孫さんは5人いたんですか?」

「いいえ…私だけよ
だから知り合いにこのカードを持ってるか聞いたけど誰も持ってなかったわ…」
少女が答えると新一はにっこり笑って言った

「この暗号のカードだけお預かりしてもいいですか?」

「えぇ…、私は思い当たるところに全部当たってみたんだけど何もなかったから…」
少女が言うと新一が言った

「あなたを絶対に守ると保障します！
だからこのカードのことはしばらく忘れてください」
少女は黙っていたが決心したのか頷いた
「…わかったわ！その代わり解けたら教えてくれるかしら？」
「もちろんですよ！」
そう新一が言うと少女は連絡先を教えて去っていった

その後…
「何であの子と一緒に行動しなかったのよ！」
蘭は新一の行いに疑問を持っているようだ
「だからそれは、彼女を危険にさらさないためさ！」
新一が言うとますます蘭は首をかしげた
「どういうこと？」
「あの彼女が言ってたスパイって言うのはこの暗号が目当てなんだよ！
それをふまえると5人には違う暗号が渡っていて協力しないと解けないって訳さ！」
新一が自慢げに言うと蘭がもう一度問う
「じゃぁあのスパイって…」
「あぁ…きっと5人の中の誰かかそいつが差し向けたかだろーな…

だから彼女から暗号を預かったんだよ！
俺たちに渡ったと気付けば奴らは彼女に用はないからな…」
それを聞いて蘭は少し安心したがようやく気がついた
「それって…私たちが追われるんじゃないの！？」
「気にすんなって！俺がついてるしな！」
新一はそういうと暗号の紙を見ながら嬉しそうに笑った
（やっぱりこうなるんだ…）
蘭の思いも露知らず、名探偵はお宝を手に出来るのか！？

ｈｏｎｅｙｍｏｏｎ－予測不能－（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか？
やっぱり新一は事件のときが一番輝いてる！てことで暗号をつけてみました。
かなり単純すぎて新一と皆さんごめんなさい。
このお話は蘭ちゃんの蹴りと新一の暗号に酔う顔が頭に浮かんで頂ければそれで作者は満足ですｗｗ

ご感想・ご意見・評価をぽちっとお願いします。
明智つばめ

ｈｏｎｅｙｍｏｏｎ－５番目－（前書き）

新婚旅行でまさかの暗号！？
しかもなんだか裏がありそうで…
ミステリー編です！

ｈｏｎｅｙｍｏｏｎ－５番目－

新一と蘭はホテルの部屋に戻っていた
蘭はベランダに出て景色を眺め、新一はライティングデスクに座り
パソコンを広げ必死にメモをとっている

（確か、ハワイ州にはカメハメハ大王像が３つある
でも双子ってどういう意味だ？）

「何か分かった？探偵さん？」
蘭が問いかけると新一は低く唸って言った

「う～ん…
二体銅像がある地域はないし双子の意味が分からね～んだよ！」

蘭はパソコンを覗くと何かに気がついた
「ねぇ…
双子ってこれのことじゃない？」

蘭が指さした先には
『ホノルルにある像は一度運搬中に海に落ちた
その後、新しい物が設置された』

「そうか！
別の場所にある二体は両方ホノルルに飾るはずだったんだ！
だから双子ってことは二体が本来あるはずの場所に行けばいいってことか！」
新一はそう言うと部屋から出ていった

「ちょっと待ってよ！
新一～！」
蘭が慌てて後を追った

ーカメハメハ大王像前ー
新一は怪しい物がないか探していた

「う～ん…
特に怪しいカードとかはなさそうだけど…」

新一が諦めかけていると
偶然通りかかったハワイアンの夫婦が銅像の花を怪しげに見ながら話しているのに気がついた
『まだレイデーじゃないのにもう飾ってあるわ！』

『きっと大王にどうしてもあげたかった観光客がいるんじゃないかい？』

（えっ？
じゃぁ怪しいのはあの銅像の腕にかかっているレイなのか？）

新一は恐る恐る手を伸ばしレイを掴んだ

「ねぇ、これって造花じゃない？」
蘭がレイに着いていたプルメリアの花をさわると花が一つ落ちた
もう一つ足りなかったが辺りには花は一つしか見当たらなかった

「あぁ、一週間前に飾られた花が今も綺麗に咲いてるわけね～からな！」

そう言うと新一は落ちた花を拾い上げた

「んっ？何かかいてあるぜ？」

「本当だ！えっと…」

『ｔｅｌｌ　ｔｈｅ　ｔｒｕｔｈ
本当に言いたかったのは…』
蘭が読み上げると新一が不安な顔をした

「本当に言いたかったのはってことはこの話にはかなり裏がありそうだな」

「裏って…」
蘭も不安げな顔をする

「とりあえず他にカードとか何か手がかりになりそうな物を探そう

ぜ！」
新一が言って二人で念入りに1時間もカードやメモは見つからなかった

「見つからないってことはもしかしたら他の奴らに先を越されたか最初から5人なんて嘘だったか…」

「でもさ、嘘なんて言う必要あるのかな？」
蘭が首を傾げると新一は電話をかけはじめた

「もしもし…」

『あっ！探偵さんね！
謎は解けたかしら？』
電話した先はもちろん新一に暗号を託した彼女だ

「はい…
でも次の暗号が見つからなくてですね」
新一が困った顔で言うと彼女は言った

『そうですか…
だったら祖母は何のために暗号なんか残したのかしら…』

「お尋ねしたいんですけど…もしかして貴女のお婆様って養子を何人もとってませんでしたか？」

『ええ…
皆さんすでになくなってますけど…』

「何人でしたか？」

『ちょうど４人だったかしら？』

「そうですか…
また何か分かったらご連絡します！」

『ありがとう』

彼女がそう言うと新一は電話を切った

「何かわかった？」
蘭が心配そうな顔で覗き込む

「いいや…
わかったことは

彼女のお婆さんは養子をとっていたが皆なくなってるってことだけだよ…
」

「そっかぁ…」
蘭ががっかりしていると新一はニヤッと笑った
「でも手がかりは見つけたぜ？
この常夏の島に似合わない黒いスーツの男をさがせばいいんだ！」

そう言うと新一はホテルに向かって歩いていった

「まったく…
新婚旅行どころじゃないじゃない…」

蘭がそう言ったのを新一は聞いていたらしく反撃をはじめる

「ホームズも言ってるだろ？
些細な事件の方が極めて単純だが奇妙な方向に発展することが多いって！
この事件はまさに単純だが普通では予測できないくらい奇妙なんだからよ！」

「そうかもしれないけど…
あの女の子も名前名乗らないしあやしくない？」
蘭は不安げだ

「あえて名乗らなかったか…
でも、彼女のお婆さんの名前は知ってるぜ？」

「えっ？」

「手紙が入ってた封筒に薄く書いてあったんだよ！
タカミヤサキってな！多分お婆さんの旧姓だと思うんだ！」

「じゃぁ何で今までそれを言わなかったのよ！」
蘭が言うと新一は声をしずめて言った
「言えなかったんだよ…
彼女は本当の孫じゃないからな…」

「どういうこと？」

蘭が疑問を問うと新一は手のひらにペンダントを出して言った
「このペンダントはきっと大事な物なのに彼女は一言も言わなかった
知らなかったんだよ！
本当の孫がこんなもの持ってるなんて！」

「じゃぁ…
あの養子の話も…」

「あぁ、でっち上げさ！
彼女は自分達をいないことにしたいみたいだしな！」

「それって…」

「あぁ、俺たちは利用されたのさ！
本当の孫を換金してそのお婆さんって人から金をせしめたかったけど、すでにお婆さんは亡くなってて遺言だけが残っていた
孫は吐かないし途方に暮れてたところに偶然俺たちが来た
彼女と写真が似てたのはきっとお婆さんを騙すためにそっくりな人を連れてきたか整形だろうな…」

「じゃぁ、本物のお孫さんを探さないと！」

「だ～か～ら～
言っただろ？
スーツの男を探せって！
そいつらがきっと居場所を教えてくれるぜ？」

新一がそう言うと
木陰に黒い影が動くのが見えた

「真実は知りたい者には必ず解けるように出来てるんだ！
どんなに奇怪で奇妙でもな

蘭…
先に部屋に帰ってろよ！
俺はちょっと用事があっからよ！」

新一はそう言うと夕陽が沈みかけている海岸を走っていった

「ちょっと！しんいち～！」

蘭は新一の後ろ姿に叫んだが新一は遥か先に消えていた

「しょうがないなぁ…
早く帰ってきてね
探偵さん？」
蘭は小さな声で呟くと海岸を一人で歩いていった…

ｈｏｎｅｙｍｏｏｎ－５番目－（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか？
今回はどちらかというとホームズみたいに新一は分かってるけど言わないというスタイルですので色々ぐちゃぐちゃしていて読みづらかったらすみません…
結局暗号は何だったの！？ってなると思いますが次回ご説明しますので見捨てないでくださいね☆

ご感想・ご意見・評価をぽちっとお願いします！
明智つばめ

ｈｏｎｅｙｍｏｏｎ－目的－（前書き）

新婚旅行編です。
最後はちょっと甘くしてみました♪

ｈｏｎｅｙｍｏｏｎ－目的－

蘭がホテルの部屋の扉を開けると新一が部屋に入ってきた

「どうだった？」
蘭が尋ねると新一は言った

「ちょっと通りに出たら車に乗りやがってよ！
でも男に発信機と盗聴機仕掛けたから居場所はわかると思うぜ！」

「だったら早く助けに行った方が…」
蘭が心配そうな顔で言った

「あぁ、そうだな…
もうすぐ知り合いが来ると思うから、そしたら助けに行けるぜ？」

新一の言葉に蘭はほっと胸を下ろした

「良かった！」
蘭が言った時にちょうどノックの音がした
新一が開けるとアロハシャツの男が入ってきた

『お～！元気だったか？少年！』

そう言われて新一はアロハシャツの男と抱き合って挨拶を交わすと
蘭を紹介した

『こちらは僕の妻の蘭です！』

『おぉ！新一にふさわしい素敵なお嬢さんですね』
アロハシャツの男は照れている蘭と握手をすると自分の紹介をした

『私は警察の者です！
新一君から女の子の救出をしててほしいと言われまして！』

「えっ？じゃぁ…」

蘭が目を丸くした

「今回は俺達はいかね～よ！
俺は助けた女の子に真相を聞けば十分だ」

「新一らしくないね～」

「バーロー！
おめーが不安そうな顔ばっかりしてるからだろ？」

新一は言うと警察の男に言った

『女の子のことお願いします！
明日ここへ連れてきて下さい！』
新一が言うと警察の男は言った

『わかりました！
新婚旅行の邪魔をしてすまなかったね
また会いましょう！』
彼は部屋から出ていった
遠くでパトカーのサイレンの音が聞こえた

ーホテル最上階レストランー
「てっきりまた事件を追うのかと思ったわよ！」
蘭が呆れて言うと新一が料理を頬張りながら言った

「行かね～よ！
敵が４人以上いるのに一人で乗り込んだら確実にアウトだし、銃を持ってる可能性が大きいし…
ここで死ぬわけにはいかね～んだよ…」

「はいはい、
好奇心旺盛な探偵さんも成長したわね」
蘭は笑うと新一の口に付いたソースをナプキンで拭った

「わっ…悪かったな…蘭…」

「気にしなくていいよ！
新一がすぐどこかに行っちゃうの慣れてるしさ、
慣れないと新一の奥さんなんか無理だよ！」

「…ありがとな！」

「うん！」
二人は向かい合って笑った

ホテルの部屋
『先程、詐欺グループが捕まりました
主犯は男性会社員で以前勤めていた会社の会長から金を巻き上げることが目的だった様ですが、他にも数件の余罪を追求しています
その会社の会長は先週亡くなったばかりでしたが誘拐されたお孫さんは無事でした』

そこまで聞くと新一はテレビとにらめっこするのをやめた

「新一の言ってた通りだったね！」
蘭が言うと新一はちょうど持っていた飲み物を開けたところだった

「あぁ」

「そういえば何で明日彼女に来るように言ったの？」

「このペンダントを渡すためさ！」
新一はそう言うと鎖の切れたペンダントを取り出した

「そっかぁ！
大事なものみたいだしね！」
蘭が言うと新一は頷きながらペンダントをしまい、蘭に近づいた

「明日からはおめーのために時間を使わせてもらうよ」

「えっ！」
新一は蘭をお姫様抱っこしてベッドに座らせるとゆっくりキスをした

遠くで波の音がささやかに聞こえていた…

ｈｏｎｅｙｍｏｏｎ－目的－（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？
やっぱり新一は事件の時が一番楽しそうということで事件を入れさせて頂きましたがラブラブのがいい！というご意見があったのでラブラブ中心にしました。
次回で新婚旅行編は終わりにします！
よろしかったらご覧ください！

ご意見・ご感想・評価お待ちしています。
明智つばめ

ｈｏｎｅｙｍｏｏｎ－本当に言いたかったこと－（前書き）

新婚旅行編ラストです。

ｈｏｎｅｙｍｏｏｎ－本当に言いたかったこと－

朝・レストラン
コーヒーのお代わりを貰いながら新一が口を開いた
「今日は昼前に女の子が来るからそのあとは好きなところに行けるぜ？」

「うん！
お母さんたちにお土産も買わないと！」

「あぁ～そうだなぁ…」
新一はお土産と聞いて何か思い出したらしい

（そういえば、かぁさんがハワイ限定のバックがあるからとかなんとか言ってたな…）

「どうしたの？」

蘭が新一の顔を覗き込むと新一は慌てて言った

「あっ…いや…」

『蘭ちゃんにも何かドーンと買ってあげなさいよ～！
新婚旅行なんだから思い出に残るんだから！』
（って言われてもなぁ…）

新一は由紀子に旅行に行く前に言われた言葉を思い出して蘭をちら

っと見た

「また変なこと考えてるんでしょ～！」

「考えてね～よ！

おめーが何か欲しそうに見てくるからだろ？」

「えぇ！私、おねだりなんてしてないわよ！」

「じゃぁそんな目で見るんじゃね～よ！」

「そんな目ってどんな目よ～！」

「こ～んな！」

新一は蘭に上目遣いをした

「してないわよ～！」

蘭はそう言うとプイッとそっぽを向いて席を立った

「先に戻ってるからね！」

「あぁ…」

新一もかなりふてくされていた

蘭はホテルの中を一人で歩いていた
（なによ！おねだりなんてしてないのに…）

だが、あるお店の前で足がとまった
（ネイルアートか…
結婚式はチップにしちゃったからなぁ）

「そういえば園子が…」
『たまにはいつも以上にお洒落して新一くん驚かせてみれば？
見る目が変わるかもよ～』

「う～ん…
時間あるしやってみようかな…」

蘭はネイルショップに入っていった

その後、部屋に戻った新一は…

「あれ？蘭どこいったんだ？」
そう言いながら新一はメールを見た

『ちょっと時間かかりそうだから女の子の話聞くの私はパスするね
ごめんなさい！
蘭より』

「なんだよ…
時間かかるって…」
新一が悪態をつきながら携帯をとじるとノックの音が聞こえた

新一が慌ててドアを開けると少女が立っていた
「あの～警察の方にコチラにくるように言われたんですけど…」

「はい！
お待ちしてました！
コチラに座って下さい！」

新一は隣の部屋のソファーをすすめると自分も向かい側に座った

「実はペンダントを預かってまして…」

新一がペンダントを取り出すと少女は涙を浮かべた

「ありがとうございます！」

「これはお母さんの形見なんですか？」

「はい…」
彼女は小さな声で頷いた

「今まで何があったか話していただけませんか？」

「はい…
一週間前、たった一人の家族だった祖母が亡くなりました
その後、祖母の養子だという４人が家まで押しかけてきて、手紙はないかと言われました
彼らはあの手紙は財産のありかだと思ってたみたいですが実は祖母からの忠告だったみたいなんです…」

「だからカメハメハ王の像の前に貴女は行った」

「えぇ、でも彼らに見つかってしまって…
祖母が本当に言いたかったのは貴女を助けたいってことだったんです
それに彼らも気がついて貴女を助けたいと書いてあった花だけとったんです」

「そうですか…」
新一が頷くと彼女は封筒を取り出した

「探偵さんにはご迷惑をおかけしました

これはお礼ですので受け取ってください」
彼女は軽くお辞儀をして封筒をさしだした

「ありがとうございます
あとひとついいですか？」
新一が言うと少女は頷いた

「養子だと言っていた人たちとの関係は…」

「祖母の会社の従業員だった人たちです
祖母の会社は5年前に他の方にお譲りしたんですがその際にかなり
揉めてひとり自殺したんです」

「それじゃぁ
あの人たちは…」
新一が驚くと少女は言った

「自殺した従業員の息子と当時の従業員です
こうなるのも時間の問題でした
あの人たちは本当に暗号は祖母の遺産だとおもってたみたいですけ
ど…
私は祖母が私を助けようとしてくれてた…
それだけで充分です」

彼女は無理矢理笑顔を作ると席を立った

「本当にありがとうございました！」

彼女が出ていくと数分後に鼻歌まじりの蘭が入ってきた

「なにやってたんだよ！」

新一は言ったが蘭の爪を見て前言撤回した

「どう？かわいいでしょ？」

嬉しそうに蘭が言うと新一は言った

「あっあぁ…

よかったな…」

「なによ～！

もうちょっと褒めてくれたっていいじゃない！」

蘭がすねると新一は蘭の手をとってベランダに出ていった

「あんまり毎日褒めてたら成長しないだろ？」

新一はむにっと蘭の頬をつかんで笑った

「いつも褒めないくせに…」

二人はベランダから海を眺めた

それから3日間、二人は何事もなく旅行期間を過ごした
買い物をしたりお土産をかったり美味しいものを食べたり夜景をみたり…
そして最後の夜はあの事件の少女から貰ったチケットで最高級ホテルのディナーを楽しんだ

そして帰国するといつもの日常に戻っていった…

「ねぇ、今日の予定わかってる？」
蘭が言うと新一がコーヒーを片手に頷いた

「わ～かってるって！
早めに帰りゃいいんだろ？」

「絶対だよ！」
そう言って新一のスーツの袖をつかむ

（毎日無意識で誘惑してくるんだよな、この女は…）
そんなことを思いながら新一は玄関に向かった

新婚旅行の始まりは散々だったけどこれから甘い日常が待ってるとしたら許してくれるよな？

本当のプロローグはきっとこれからだ…

ｈｏｎｅｙｍｏｏｎ－本当に言いたかったこと－（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？
旅行の内容が薄いと思われたかもしれませんがこれ以上書くと同じ内容の無限ループになる気がするのでもし、こういう場面が見たかった！などのリクエストがありましたら短編でアップさせていただきます。
今後は新婚生活編を最終話としてアップしたいと思いますのでよろしくお願いします。

ご意見・ご感想・リクエストお待ちしています。
明智つばめ

Ｈｏｎｅｙ（前書き）

新婚生活編です！
一応連載内に入っていますが短編でも楽しめる内容ですのでぜひ読んでみてください！

Honey

それは夜も更けた頃…
工藤邸での出来事

（なんか眠れないなぁ…）
蘭はちらっと隣を見ると新一が寝息を立てている

（今日も帰ってくるの遅かったし起こすのかわいそうだなぁ…
とりあえずお手洗いでも行ってこよう）
蘭はそ～っと部屋を出た

その後、手を洗って部屋を出ようとしたとき…

（あれ…
書斎に誰かいる…）
電気はついていないが人の気配を感じた

（泥棒とかかな…
お化けだったらどうしよう！）
そしてそっと書斎をドアの隙間から覗いてみる

（あれ？誰もいない…）
蘭は書斎に入ると妙なことに気がついた

（本がもとに戻してある…）
トントンと肩を叩く音
蘭が振り向くと…

「な～にやってんだよ！
こんな夜中に電気もつけずに！」
新一はあくびをしながら言うと蘭が抱きついた

「だって…だって…」

「どうしたんだよ？」

「本が動いてるんだもん！」
涙目の蘭が指をさすと新一は本をつかんだ

「動かしたのは俺だよ」

「えっ？」

「いつも資料はぐちゃぐちゃになったら困るからさわるなって言ってただろ？
だけど、俺がいないとき崩れたらあぶね～なって思ってよ！

たまに夜な夜な片付けてたんだよ！」
新一が言うと蘭はやっと落ち着いたらしく反撃を開始した

「何で電気もつけずに夜な夜ななのよ！」

「それは…
起こしちゃ悪いと思ったからだよ…」

「しんいち…」
私と同じことを思ってたんだと蘭は嬉しくなった

「おめーが怖がりなの知ってるからよ！
いつかこうなるんじゃね～かと思ってたぜ！」
新一はニヤッと笑った

「もう！そうやっていつも意地悪言うんだから！」
蘭がちょっと膨れると新一はキッチンに行き湯気のたったカップを二つ持ってきた

「これ飲んだら寝よ～ぜ！
俺も疲れたからな」

蘭は新一が持ってきたカップを受け取ると一口飲んだ
ハチミツが入ったホットミルクだった

「おいしいね、これ！」蘭が言うと新一が返した
「そうだろ？
眠れないときの薬だってよくかぁさんが作ってたよ」

「へぇ～！そうなんだぁ！」

「でもな…」
新一はそう言うと蘭にキスをした

「このあとはもっと甘いんだぜ？」

蘭は真っ赤になっていた
「なっ…何いってんのよ！
わっ…私寝るからね！」
蘭は飲みほしたカップを持ちながら寝室へ戻っていった

寝室…
（新一ったらカッコつけちゃってさ…
でも嬉しかったかな…）
蘭がそんなことを思っていると新一が入ってきた

（あのセリフは言わない方がよかったかもしれね～な…）
新一は蘭の方を見て微笑むと落ち着いたのかすぐに眠りについた

「本当は…
本のこともホットミルクもキスも嬉しかったよ」

そう言うと蘭は眠っている新一にキスをした

その後、
蘭は気に入っていつも飲んでいた

あま～い、あま～い
ホットミルクを…

Ｈｏｎｅｙ（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか？
新一のキザというかこんなこと言うのかな…ってセリフを入れてみました。
蘭ちゃんを茶化すときならこれくらい言うかもしれないなって思いまして…
ご感想・ご意見・評価お待ちしてます！

明智つばめ

doubt！（前書き）

蘭が新一の浮気を疑うお話です。

doubt!

電話に出ている彼を扉からそっと覗いていた

「もしもし
なんだよ！何か用があんだろ？」

「えっ？
あ～あぁ、それはまだ考えてる途中だし…
イギリスのお嬢様とフランスのわがままな娘とじゃ訳が違うだろ？
どっちにしろ日本には合わね～んだよ！」

新一はそんなことを言いながら部屋の中を往復していた

「何のことだろう？」
蘭はこっそり耳にしてしまったいくつかの言葉に引っかかっていた

（イギリスのお嬢様とフランスのわがままな娘って…
まさか…！？）
蘭は要らぬ勘違いをしたらしい…

次の日
「なぁ…

何でいちいちこの部屋の前を通るんだよ！
気になるんだよ！」
新一が言うと洗濯物を持ったままの蘭が言った

「探偵なんだから自分で考えたら！」

蘭は明らかに機嫌が悪い…

「何なんだよ…」
新一は一人になった部屋で呟くとまた本を読み出した

「本当にそうなのかな…」
蘭は洗濯物を干しながら考えていた

とうとう一人では埒があかないと思ったのか携帯を取り出して電話をかけた

「もしもし？園子？」

『どうしたのよ？』
電話口の園子が心配した

「実は昨日ね…」
蘭は新一が電話で言っていたことを蘭に話した

『えぇ！イギリスのお嬢様とフランスのわがままな娘と浮気～！？
まっさか～！
あの新一くんに限ってそんなことないない！』

「でも…」
蘭は不安そうに言った

『蘭、何かの例えかもしれないしよく聞いてみた方がいいかもしれないわよ？
じゃないと本当に二人の女に取られちゃうかもよ～！』

「ちょっと！園子～！」

『とりあえず本人に聞いてみたほうがいいと思うわよ！』

「うん！」
蘭は親友との電話を終えると洗濯物を片付けて新一のいる部屋に向かった

「あの…」

「どうかしたのか？
おめー顔色悪くね～か？」
新一は顔を近づけると自分のおでこを蘭のおでこに当てた

「だいじょうぶよ！」
蘭がサッと新一から身を離した

「ほんとか～？」
新一はまだ疑いの目を向けている

「具合わりぃんだったら早く言えよ！」

「うん…
実は…具合が悪いんじゃなくて…
その…」
蘭は言いづらそうに口ごもった

「昨日のことか？」

「えっ？」

「昨日、大事な書類にコーヒー溢しちまってしょげてただろ？」

「そうじゃなくて！」
蘭の声は段々大きくなっていた

「なんだよ？」

「昨日の電話…」

「電話？
あぁ、かぁさんからだよ！」

「どういうこと？」
蘭は目を丸くした

「まさか…」
新一はそう言うとクスクス笑いだした

「なによ～！」
その新一を見た蘭は何が何だか分からない

「あれだろ？
イギリスのお嬢様とフランスのわがままな娘！」
新一はまだ笑っている

「うん…」
蘭は頷く

「あれは車のことだよ！」
新一はようやく笑うのをやめると蘭に説明した

「イギリスのお嬢様ってのは俺のかぁさんが乗ってるジャガーのことで、わがままな娘ってのはフランスのアルファロメオって車のことさ！」

「そうだったんだ！
でも何でそんなこと…？」

「何でって、
ジャガーは高級で落ち着いたイメージだからお嬢様で、
アルファロメオは、
よく不具合があってそれを自慢するアルフェスタっていう人達がいるくらいだからわがままな娘ってわけさ！」

「そうじゃなくて！
何で車の話なんか…」

「それはだな…
かぁさんがもし乗るなら何がいいって言うから言っただけだよ…
軽量化された日本車より外車のが事故にあった場合に衝撃に強いしな！」

「へぇ〜！
じゃぁどんなのに乗りたいの？」

蘭が聞くと新一は腕を組ながら答えた
「う〜ん…
探偵なのにあんまり目立つのもなって思うし、かといってあんまり
地味なのも嫌だし…」

「決められないんでしょ？」

「あぁ、まぁな…」
そう言って新一はちらっと蘭を見た

「でも…
車より助手席（となり）に乗るやつのが重要だと思うぜ」

新一のその言葉に蘭は笑った

いつか愛車を持ったら君を最初に乗せよう
そう思うと何だか嬉しくなった

ｄｏｕｂｔ！（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか？
実は作者は娘のくせに車好きで特にアルファは大好きです！
有希子さんが東都現像所の事件のときに借りたレンタカーがアルファだと気がついて興奮してましたｗｗ
もし、新一が乗るなら…
やっぱり外車ですかね～、色は赤か青が似合うと思います！
でも、黒は絶対になさそうですね！
戯言はさておき…
ご感想・ご意見・評価お待ちしております。

明智つばめ

chocolate love（前書き）

新一のプロポーズ大作戦！！の最終回です。
ちょっぴり甘いお話です！

chocolate love

コーヒーはブラック
飴はハッカキャンディー
好きなものはレモンパイ
どう見ても甘いものが好きそうでもない男の机には食べかけのチョコレートがのっていた

「新一ってチョコレート好きだっけ？」
蘭は部屋を片付けながら思った

そこにちょうど新一が現れた
「それ、片付けるの忘れてたな…」
そう言うと新一はチョコレートを取るとパキッとかじった

「新一ってチョコレート好きだっけ？」

「好きというか、糖分確保の為に食べてるだけだよ！
頭を使うと甘いものが欲しくなるっていうだろ？
食べるか？」
新一は蘭にチョコレートを渡した

「うん！」
蘭はパキッと割ると一つ食べた

新一は蘭のその甘くなった唇にキスをする

「えっ？」

「同じ味なんだからいいだろ？」
新一は照れくさそうに言っていたがその後…

「疲れた…」
そう言ってソファーに座ると蘭も座るように促した

「ねぇ、新一覚えてる？
あれ…」

新一は蘭の肩を借りて寝てしまっていた

「最近、忙しそうだったもんなぁ…」

一応、彼の仕事は私立探偵だが警察関係者が持ち込む仕事のが大半だ
たまに家を訪ねてくる人もいるが最近は昼間はいないことが多く、
後程連絡することを蘭が伝えている

蘭は眠っている彼の横顔を見ながら昔のことを思い出していた

それは小学生になって間もない頃…

「蘭ちゃん誕生日おめでとう！」
園子をはじめ、クラスの女の子達が蘭に文房具などのちょっとしたプレゼントを渡していた

（あっ…
今日蘭の誕生日だったんだ…）
蘭がプレゼントを貰う光景を横目で見ていた新一は自分がそれを忘れていたことに少し腹を立てているらしい…

蘭は新一の視線に気がついて声をかけた
「しんいち～！」

しかし
新一は蘭を無視して走っていってしまった

「新一どうしたのかな…」
しょんぼりしていた蘭に園子が声をかける

「大丈夫よ！
新一君ならきっと蘭の誕生日覚えてるよ！」

「うん…」
蘭は頷くとまた女の子達と話を始めた

放課後…
新一と蘭は一緒に帰っていた

「ねぇ、今日何の日か知ってる？」
蘭が尋ねると新一はちょっと頷いた

「蘭の誕生日だろ？」

「うん！」

「欲しいものとかないのか？」

「う～ん…」
蘭は少し考えてからちょうど通ったお店のチョコレートを指した

それは箱に入った宝石みたいなチョコレートで小学生が買えるような一品ではなかった…

「わかった！明日やるから待ってろよ！」
新一はそう言うと走って帰ってしまった

そんな新一の後ろ姿を見ながら本当は誕生日プレゼントなんてもらえるわけないと蘭は思っていた

次の日は休日だった
新一は迷わず蘭の家に向かった

「蘭！誕生日おめでとう！」
新一はそう言うと昨日、蘭が欲しがっていたチョコレートを差し出した

「新一！ありがとう！」
蘭はそう言って笑った

蘭が後から聞いた話だがあのチョコレートは新一がお手伝いをするという面目で有希子にかってもらったらしい…

蘭はそんな思い出を思い出しながら隣で寝ている新一を見て微笑んだ

「昔から変わってないな…」

そう言いながら笑っているといつの間にか新一の目が覚めていた
新一は軽く伸びをすると蘭に言った

「何笑ってんだよ」

「小学生のときに新一にチョコレート貰ったの思い出したの」

(かぁさんに蘭のためなら買ってやるけど手伝いをいつもの倍しろって言われたあれか…)

「あのチョコレート美味かったか?」

「うん!
すごくすごく嬉しかったよ!」

「まぁ、今日のよりかは美味いよな…」
新一はそう言いながら机にのっていたチョコレートを食べた

思い出はずっとずっと残る

今日のこともきっと思い出す

どんなに安いチョコレートの思い出でも
あの高級なチョコレートように鮮明に…

chocolate love（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか？
蘭ちゃんの誕生日は分かっていませんがきっと新一は毎年何だかんだで祝ってあげてると思います！ってことで大人な話とチビっ子話を合体させたフィナーレにしました。
連載としては終わりますが今後も短編として大人な新一と蘭を書くかもしれません！
ご愛読頂きありがとうございました！

ご感想・ご意見・評価お待ちしております。

明智つばめ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6056r/

新一のプロポーズ大作戦！！

2011年4月16日13時05分発行